

丸井グループ社史

丸井グループ

8

時の真相に迫る



夢工場PART2……第4織布工場

コスト競争力、世界一への挑戦。

「夢工場PART2」にかける

平成8年10月15日、新装なった丸井織物の織布工場に、ウォータージェットルームの規則正しい稼働音が響き渡った。それは、丸井グループが定番のポリエステル裏地の分野で、「コスト競争力」世界一の工場を目指して走り出した号砲であった。

縦66メートル、横37メートルの工場の中央に大きな通路が走る。その両脇には、織機が四台ずつ並び、無人搬送車が織り上がった布を次々に運んでいく。従来の織布工場のイメージを一新したこの新工場こそ、二年前、七尾市内に完成させた日本最大のサイジング工場に続く、丸井グループの「夢工場PART2」にほかならない。

丸井グループが年間に生産するポリエステル裏地は国内生産量の40%を占め、文字通り日本一である。グループの動向は、東レが再構築を進める織布の世界戦略とも密接に連携する。端的に言えば、韓国、台湾、東南アジアなどの猛追の中で、コスト的に決定的に不利な国産ポリエステル裏地が生き残れるかどうかをかけた戦いの最前線に、丸井グループが立っているわけである。

このため、新しい織布工場の至上命題は、一にも二にもコストの低減だった。技術開発部を中心に二年前から織機の改良に取り組み、消費電力で10%減、停止回数も1日平均2回とこれまでの半分に減らす専用織機を完成させた。システム的には、F AやO Aをフルに活用した結果、デスクワークがほとんど不要となり、省人化を促進することができた。

このほか、コンピューターに入力された情報を基に、織った布を検査せずそのまま染工場へ出荷

したり、ウォータージェットルームに使う水の再利用を進め、水道料金を低減させることにも成功した。

これらトータルなコスト削減が奏効し、製造コストは従来の2分の1に引き下げることが可能となった。それは、社員一人ひとりが持てる能力を傾け、総力をあげた血のにじむような努力の積み重ねの上に、初めて達成できた快挙だった。

新工場の投資額は8億円あまり。工場に並ぶ96台のウォータージェットルームは、来年末にはさらに56台増設され、152台となる。スケールメリットによるコストダウン効果が、丸井グループの夢である「コスト競争力」世界一を、確実に現実のものに変えてくれる。

現在、丸井グループの月間生産量は18万正に達し、これは合成長繊維織物の川中部門に特化した北陸産地の生産量の約10%に該当する。東レ傘下で見れば、チョップ25社、50万正の実に35%を占める。一方、生産品目の比率は、裏地50%、スキーを主力とするスポーツウエア生地25%、ゴムテープなどの産業資材10%となっている。

徹底したコストダウンと、他社の追随を許さないハイクオリティな製品を生み出す技術力。新工場は、創業者・宮本米吉以来、伝統となってきた丸井グループの「挑戦」の道程の一つでしかない。

だが、それは近年、製造業の海外移転が進む日本の産業空洞化に対し、敢然と立ち向かう不屈の宣言でもあるのだ。